

## 報告2. 近世から近代へ

～「ウェスタン・インパクト」と近代日本社会、その受容と「反発」～

山本 裕（香川大学経済学部）

ただ今ご紹介いただきました、香川大学経済学部の准教授を務めております、山本裕と申します。

私が本日お話し申し上げるのは、「近世から近代へ—「ウェスタン・インパクト」と近代日本社会、その受容と「反発」—」と題することについて、お話させていただきます。

タイトルは「近世から近代へ」ということなのですが、徳川幕府が終わる頃に、幕末開港を迎えます。1853年、アメリカのペリーが黒船4隻で東京湾の、神奈川県今の浦賀というあたりにやってきました。それによって、日本はいわゆる鎖国というものが終わります。実際鎖国というのは、昨今の見解についてみれば、ヨーロッパであればオランダ、そして中国、朝鮮王朝とは連絡を密に取っていたわけで、本当に何もかも閉じていたわけではなかったという意見が主流となっております。ただ大々的な交易をやっていたわけではなかったことも、また事実でありました。「鎖国」の状況が一転して、ヨーロッパ、アメリカの文化、文物が全部入ってくるという状況、そしてその後徳川幕府は崩壊し、新しい時代、いわゆる明治維新へと移ってまいります。

このように、近世から近代へと時代が転換する中で、当時の人々はどのように生き抜いたのでしょうか。つまり、激動の時代をどうやって人々は渡り行こうとしたのか、あるいは泳いで行こうとしたのか。そういった先人たちの人々の歩み、軌跡のようなものを、ここではちょっとコンパクトにいくらか申し上げようかなと思います。

本報告では、いわゆるウェスタン・インパクト、黒船がやってきた後の変化をこのような表現で説明いたします。西欧の文物・文化がワットと入ってくるような状況、すなわち、西欧近代からの衝撃を、学問と学問体系に裏付けられた価値観に着目して、それらを受容しようとした人々の諸相を考察します。もちろん、本当に受容できた人もいれば、諦めちゃった人もおり、反発する人もおり、さまざまな人間模様がそこにはあったということです。そのような人々の姿を本日は若干見ていこうかなと思います。

構成ということで、第1節「近世から近代への移行と人々の行動」という所では、自由民権運動に着目して、お話しいたします。

2番目は「近代日本社会における教育システム」です。西欧由来の普遍的価値観を身体化しようとした人々です。例えば、学校に行く、時間は守るといったこともそうです。私の大学のゼミの学生が卒業論文で書いたんですけども、彼はゼミで勉強したいことについてこんなことを言ったんです。「先生、なんで遅刻しちゃいけないんですか」「良くないよね、それは当たり前だよ」「でも僕サッカー部なんですけど、5分前集合に遅刻したらすごい怒られました」怒られるのが私たちの当り前の価値観なんですけども、でも例えば江戸時代、5分前集合という概念はそもそもあったのでしょうか。江戸時代は約2時間に一度撞くお寺の鐘とか、お寺の鐘を4分割する30分ぐらいの時間感覚はあっても、5分という概念はまだなかったのではないだろうか。とすると、きっちり時間通りに行う集団行動というのは、明らかに近代の産物、明治以降の産物と言ってよいのではないのでしょうか。そういうようなことも含めて、あるいは学校で学んだことで自分が立身出世していく、様々な西欧的な価値観を身体化しようとした人々の話をしてまいります。

3番目は小括として、ただ今申し上げましたような時間は守ろうというような、あまりにも当たり前過ぎますが、こういう「当たり前」の価値観・制度、その来歴と人々への「拘束」あるいは「反発」、そ

ういったことについて見ていきたいと思います。

主要登場人物について申し上げます。まず、福沢諭吉。近代日本の啓蒙家であり、教育家であります。続きましては、板垣退助。近代日本の政治家です。そして、その時代を懸命に生きた当時の若者群像について、名前というよりもこんな人たちが、こんなことをしようとしていたという、集団で見たいこうと思います。これらに注目しながら、近代日本社会における学問と、それをめぐる諸問題について考えていこうと思います。

「近世から近代への移行と人々の行動—自由民権運動に着目して—」という第1番目のテーマです。近世日本社会ってなんだろう。江戸時代、侍、いろいろ表象的なイメージは浮かびますけれども、ちょっと勉強っぽいキーワードで言いますと、幕藩体制とか、あるいは身分制社会なんていうのがよく用いられております。幕藩体制っていうのは何かと言いますと、幕府と藩、この多度津でしたら江戸時代は丸亀京極藩の分藩で石高が1万石だったことで知られています。こういう大名というのは、大名の下に侍が仕えることを封建的な主従関係と言います。米などを現物で納めさせて年貢とする石高制が基礎になっています。

封建制という言葉を手簡単に説明しますと、上位の君主が臣下に対して、その領地支配を認めて爵位を与える、臣従、貢納とか軍事奉仕を義務付ける社会制度でありました。つまりかなり身分秩序が確立された社会というのが、近世という時代でした。この近世身分社会の身分構造で申しますと、実は侍、武士っていうのは、家族、奥さん、子ども、そういった全部をひっくるめて7%ぐらいしかいませんでした。逆に農民階級、これは漁民も入れて90%弱おりました。圧倒的に農民が多かった。侍というのは本当に少なかった。そういう状況の中で、近世の身分制というのは、言うなれば一人ひとりの人間が身分的な社会集団というような袋の中にまとめられていたといえます。つまり農民は農民たちで、侍は侍たちで、そういうような形でまとめられて、支配者から集団を通じて付加される<sup>えき</sup>役、と呼ばれる仕事や任務を果たすことが求められます。

ところが近世後期には、そういう袋に入りきらないような人々も、都市を中心に実は多数発生しておりました。例えば博打打ちのような正業に就いていない人々が、幕末維新の動乱で明治維新政府の側について戦ったり、あるいは旧幕府側について戦った、なんていうことも昨今の研究で明らかになっております。

福沢諭吉という人物はとても有名で、彼が残したさまざまな言葉が今日も知られています。そして、彼は晩年口述筆記による伝記を残しています。『福翁自伝』と言いまして、その本の中で彼はこう書いています。「門閥制度は親の敵で御座る」。実は福沢自身は現在の大分県中津藩の下級武士の生まれで、お父さんはすごい勉強家で学者でもあったのですが、いわく「つまらない中津藩の仕事」をずっとさせられて、学者としても名を残せなかった。福沢諭吉が1歳のときに父である福沢百助が亡くなります。不本意な父の生涯をもたらしたものも含めて、福沢は様々な社会に対する疑問を抱きながら成長していきます。さまざまなつてを頼って蘭学を学び、英語を学び、自ら塾を開き、そして幕府の派遣でアメリカにもヨーロッパにも行きました。そういった経験の一端を『西洋事情』という本で述べていますが、この本が出版されたのは1866年でした。

福沢の著作の中で最も有名なのは『学問のすゝめ』という本ではないでしょうか。全17編で大体340万部ぐらい売れたと言われております。当時の日本の人口が三千数百万人だった時代です。海賊版が山ほど出たって話もあるので、思った以上に読まれたり、誰かが持っているものをまた読ませてもらったり、書き写したりっていうことで、広く膾炙していったというふうに使われています。

自由・独立・平等という、それまでの日本人が知らなかった価値観が、新時代の社会を支配すると、この中で主張されています。有名な「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」という文言を御存知の方も多と思います。つまり新時代における身分は、生まれではなく、学問を通じた個人の見識によるのだと。このことは、権威への服従を中心的価値としてきた封建社会の民衆像を否定して、自らが学ば学ばほど自らを助け、そして自らが社会を切り開いていくという価値観、または価値観への意識転換というものを促していったというふうに言われております。

徳川幕府崩壊後、明治維新政府の中樞を担ったのは、薩摩、長州、土佐、肥前に代表される西国雄藩の下級武士と公卿でした。

こういった彼らたちによって近代国家が目指されていきました。ここで課題となるのは、どのような近代国家をつくるべきなのだろうかという点です。いかなる国家モデルを選択するか。結果として選ばれたのが、明治新政府の主流派でありました、先ほどの山本珠美先生のお話にも登場した、伊藤博文ですとか、あるいは山縣有朋という日本の陸軍を創設した人物が主張した、プロイセン、ドイツ帝国モデルが採択されました。

ドイツは立憲君主制ですが、議会の権限が弱く、君主に大幅な権限を与えるという点に特徴がありました。ところが、選り取られなかったもう一つの道がありました。これは明治新政府の反主流派が提案したものでした。その反主流派の代表的なリーダーが大隈重信です。彼は佐賀藩の身分の高い武家の生まれで、漢学、儒学の素養があり、幕末には西欧の学問のキャッチアップをしていきました。しかし、明治新政府樹立後は当時の最先端の学問を摂取した若者たちが、大隈の下に官吏として付きます。

当時の若者はどうやって学問を摂取したのでしょうか。その多くは福沢がつくった慶應で学ぶというコースがありました。代表的な人物として、岡山出身で後に首相になる犬養毅。「憲政の神様」尾崎行雄、「三井中興の祖」中上川彦次郎、小野梓という人物は、実は早稲田を実質的につくった人物として、今でも小野記念館という形で、早稲田キャンパスの中に建物が残っています。

彼らが構想した国家像のモデルは、立憲君主制ではあるが議会の権限を強くして、君主は君臨すれども統治せずと言われたイギリスモデルでしたが、採択されませんでした。そして明治14年の政変という、1881年に起きた政府の中での権力争いで大隈が追放され、そして大隈と一緒に、大隈の下にいた慶應義塾出身の若い官吏たちも一斉に辞職します。

慶應という学校は、私が通っていた頃は民間企業に行くことこそが絶対で、官僚・役人を忌避する文化がありました。それは福沢先生由来の云々という話がありました。しかしこの話は嘘、作られた伝説です。慶應出身者は官僚になっても出世できないから、民間企業とか実業のほうに行かざるを得なかったということです。これが、いつの間にか「福沢伝説」になっていったということです。世の中には様々な伝説とか言い伝えというものがありますが、そのルーツを辿ればいかに生臭い話だったかということ、語らしめるようなものがあります。

自由民権運動の流れは、大体このような形で展開します。発生期は、明治初期の士族の動向や不平士族の反乱を踏まえる必要があります。この不平士族の反乱が1877年、明治10年の西南戦争で終焉を迎えます。武力蜂起は駄目だということから、自由民権運動はより活発化していきます。この自由民権運動の深層に潜むものとして、不平士族の反乱などが起きていた1874年頃に、民撰議院設立建白書提出と、それをめぐる論争が起きます。その論争などを見ると、江戸時代まで、近世社会までに確固としてあった身分制社会が解体されたことを前提に、どうやってこの日本社会をつくりあげていけばいいんだろうかということについて、かなり激しい議論がたたかわれます。

その一方で、自由民権運動のリーダーとして知られる板垣退助は、1877年に士族の反乱が収束したことから、ますますもって、武力で今の新政府の統治を武力で訴えて壊すことができなくなったということに気がきます。一方で、彼は軍事英雄とも評されていました。板垣退助は土佐藩の身分の高い武家の生まれで、戊辰戦争において板垣退助は司令官として大活躍します。彼の一番能力は戦争指揮能力だったという意見もあります。しかし、西郷ですら武力蜂起に失敗したということで、新たな領域で、つまり自由民権運動のような活動を強いられることになっていきます。

自由民権運動という言葉を私たちは知っていますが、その具体層についてはほとんど知らないことに気がされます。色々資料を調べますと、自由民権を鼓舞した演説の後には、アトラクションとして撃剣会という、チャンバラ的な剣劇や、試し斬りのショーを行っていました。自由民権運動の演説会ではお堅いものだけじゃなくて、しっかり楽しませるエンターテイメント的な仕組みまであった、なんていうことが、最近の研究で明らかになっています。

こういった自由民権の結社の運動と、撃剣会に集う都市下層部の人達の間には、身分制社会に代わる新しい社会を目指すというような共通点があった。つまり権利や自由といったお堅い話と、従来は侍だけが身に帯びる事が出来た剣を用いて行われたエンターテイメントショーの双方を受容する集団というのが明治初期に出来上がっていくことになります。

国会開設の勅諭は、1881年、明治14年の秋に出ますが、これは自由民権運動の側からすればショックな出来事でした。なぜならば、政府の側が議会を創設すると宣言することで、自由民権運動をもって政府と対抗しようとした彼らは、自らの手で国会をつくるという運動目標が浮いてしまいます。その結果、新たに結成された自由党による政党活動へと、運動自体が狭められていきます。しかし狭められた運動だけで本当に良いのだろうか考える人達は、成功の可能性の低い武力に訴える方向をも視野に入れ始めます。

ただ、自由党による政党活動の中で、西欧近代を扱った書物で知識を深めた人々が、自らの力で憲法草案をつくり出していったということも、またよく知られています。特にこの40~50年ぐらいの研究成果で、東京の西部、農村地帯だった五日市というところで、当時の若者だった千葉卓三郎という人物が、かなり人権保障に厚い内容を盛り込んだ私擬憲法、五日市憲法と今日言われているようなものをつくりあげたことも、昨今知られております。自由民権興隆期における社会経済状況の変動について考えれば、こういった自由民権運動を精力的に活動していく上で、日々の生活に余裕があるからこそ邁進できるという側面があったことを見逃すわけにはいきません。

しかし、余裕があるはずの日々の生活が、一点、脅かされる動きというものがちょうどこの頃発生します。当時の財政担当者である松方正義によるデフレ的財政政策が施行されます。その結果、物価下落が発生しました。当時日本社会で圧倒的な人数を占めていた農民たちは、江戸時代までの米を物納する形から、明治時代に入って、所有する土地の地価に基づいて毎年決まった金額を納税するように変わりました。デフレ状況で固定された金額を納税するというのは、実質的な負担が増します。そのような状況の中で、徐々に納税できない農民たちが現れます。そういった彼らは土地を担保に借金するんですけども、返済ができないと担保である土地が取り上げられます。そういう担保流れの土地が増加した結果、農地の価格は下落します。その一気に下落した農地を富裕層である地主たちは大量に安く手に入れます。そして農地を担保流れで手放した農民たちは、農業労働者、すなわち小作人になります。とすると、圧倒的多数の農業労働者である小作人が生まれる一方、安くなった大量の農地を取得した、もともと豊かだった地主がさらに豊かになっていきます。つまり格差の拡大の固定化という近代日本の特徴が、実は自由民権運動が盛んになり続ける一方で起きていたという側面がありました。

自由民権運動の激化の状況は、皆さんにお配りした1枚の資料に記載されている日本列島の図のところに描かれていますので御覧ください。しかし、図で示された自由民権運動の勃発状況を見ましても、なかなかイメージが湧きにくいことも事実です。そこで、福島県の会津地方にいたある兄弟の話を中心に盛り込みました。三浦信六と三浦文治という、今日ではほとんど無名な二人です。

なんでこの人を取り上げるかという、結論から申し上げます。私の母方の祖父の、そのまた母方の祖父である高祖父が三浦信六さん。その三浦信六さんの妹と結婚して婿入りしたのが三浦文治さん。二人は義理の兄弟になります。信六さんは会津地方の名望家で地主でした。そして三浦文治さんは自由民権運動激化事件の一つとして位置づけられる、加波山事件に参加して処刑されます。

一方三浦信六さん。地主で、しかし自由民権運動にも精力的に取り組んだ彼は、第1回の衆議院議員選挙に当選します。しかし第1回の帝国議会の最中に政府側の方向に寝返った結果、第2回衆議院選挙で4票しか獲得できなくて落選しました。私の指導教員の、そのまた指導教員が書いた研究書でこの事実を知ったのでした。つまり何があったかと言いますと、1880年代ぐらいのある日本の地方の家では、兄弟がこれからの日本をどうすべきなのか、何が適切な行動なのかをめぐって、激しく議論するような風景もあったのだということを、私は祖父がその母親から、つまり三浦信六の娘だった祖父の母親から、口伝という形で聞いたことを今でも覚えています。

時間がないようなのでまとめます。ポスト身分制社会を自分たちの手でつくることを目指した運動が自由民権運動でした。そして、政府と民権派の対抗関係ってというのは、本来は来るべき社会の構想をめぐる競争であったはずなんですけれども、結論から申し上げれば、来るべき社会をつくる担い手、誰が主導権を取るのかという問題へと矮小化してしまった側面がありました。

民権家たちのその後としましては、実は国内での展望を失った民権家が、東アジアに打って出るというような事件も起きました。これは、その後の近代日本社会の一側面である、「内に民権主義、外に帝国主義」、つまり日本がアジアのリーダーとなり、軍事発動も辞さず、武力も辞さずという帝国主義的な部分を含むような、この民本主義的な源流というのが、実は自由民権運動の後継的な部分で存在していたのではないとも言えます。

「近代日本社会における教育システム」ということで見ていきますと、近世と近代を社会統治の観点で比較しますと、近世日本社会というのは、武士による世襲制であったことが一番の特徴です。侍の家が代々、まさに本日の会場である邸宅の所収者であった林家も多度津藩の家老職を務めていました。もちろん家を継ぐということは、それにふさわしく学識・見識を深めていく必要があるのですが、可能性としては無能であっても家さえ継げばそれでよし、ということもまた否めないものであります。ところが近代日本社会は、明治初期の時代を除くと、高等教育機関で学んだ学生を中心とした官吏採用試験の合格者が、国家行政をつかさどりました。生まれの階層は問わない。まさに先ほどの福沢の『学問のすゝめ』的世界観っていうものが、ここで当たり前になってきます。

でも近世においては、それは決して当たり前じゃなかった。近世を越えて、ようやく、高い学力によって担保された能力によって高い地位の獲得が可能となる。これを可能にしたのが明治期の高等教育システムで、先ほどの山本珠美先生がおっしゃったことと重なりますが、東京大学が1886年、帝国大学になりました。文・法・理・医・工という各大学校で出発し、農科大学校が加わります。実は20世紀に入って、第一次大戦が終わってからやっと経済学部ができます。以下帝国大学は、京都、仙台の東北、福岡の九州、北海道、の次は、朝鮮半島の京城、ソウル、台湾の台北、以下大阪、名古屋という順番で認められていきます。つまり大日本帝国は日本列島だけで完結しなかったというのが、帝国大学システム、高等教育機関

のシステムとも言えるわけであります。

もう一つは法学系の私立学校っていうのが設立されていきます。専修学校、後の専修大学です。東京法学校は法政、明治法律学校は明治大学、英吉利法律学校は中央、日本法律学校は日大、などなどです。そして一方で政治経済学を主体とする私立学校として、東京専門学校、先ほどの小野梓、大隈重信がつくった早稲田大学、洋学塾がルーツの慶應は、1858年が自らの設立年であるとしています。よく慶應・早稲田が私学の雄と言われる理由は、実はこの明治期のさまざまな私立学校のうち、慶應と早稲田だけが当初より専任の教員を置いていたんです。逆に言うと、専修、法政、明治、中央、日大等の学校群は、当初はみんな掛け持ちで教えていたと言うんですね。だから、慶應と早稲田の地位っていうのはある種、今でいう偏差値だけじゃない部分の特有性があったというふうに使われています。これら高等教育機関は、1920年の大学令で国家が認める大学になります。

もう一つ官立実業系の専門学校の動向として、一橋大学、大阪の大阪市立大学、神戸大学のそれぞれのルーツを一括りにした三商科大学と称された実業系の学校や、今の東京工業大学のルーツなんていうのも、また一方で出来てまいります。こういった高等教育を学ぶ若者の行動規範や精神的特徴として、教養の摂取というのがありました。大学に入る前の3年間の旧制高等学校では、徹底的な外国語教育が行われました。専門的な教育である、法学とか経済学とか、医学とか農学とか工学は全部大学でやればいから、その基盤となる外国語をとにかく勉強させるというのが一般的な旧制高等学校のカリキュラムでした。彼らは外国語の勉強を様々な文献を読んで行いました。加えて、単なる受験エリート、ペーパーテストをクリアして学校に入ったばかりじゃない自分たちの姿を見せるためにも、幅広い知識としての教養を摂取することがここで機能することとなります。

そういう状況の中で、様々な西欧古典への親しみが増えていくんですけども、1920年代以降には、社会変革をも視野に入れるようなマルクス主義に関する文献をも、西欧古典の一環として受容されるようになってきました。ところがこういった社会変革を視野に入れるような西欧古典を読んでいる彼らを取り巻く社会状況は、1920年ぐらいから米騒動とか、あるいは貧しい農村、貧しい都市下層住民に代表される社会問題というものが徐々に意識され始めた頃でもありました。そういうときに社会変革をも視野に入れる西欧古典を読んだ彼らは、マルクス主義文献等についてもより読解していくような形になります。しかしそれは遅くとも1930年代初頭には政府によって、読むことそのこと自体がタブーになっていく、弾圧されていくというような事態を迎えます。

しかし、政府が弾圧した頃の日本の社会状況を考えますと、経済的には金融恐慌、世界大恐慌が起きたあとの昭和恐慌がありますし、軍事的な選択肢としての中国東北部、満洲事変というのも勃発します。社会の様々な矛盾とかが出てきているけれども、社会の矛盾を扱う西欧古典の読解は禁じられていくという社会状況の中で、さて若者は何をしたのでしょうか。加えて一方で、この恐慌のあとには景気は回復しまして、より多くの方が高等教育を学べる機会も増えます。具体的には実業系の、特にテクノクラート、エンジニア養成の学校がどんどん増えていきます。

高等教育を学ぶ同世代の割合が上昇するという状況の中で、しかし彼らはやっぱり他の人とは違うんだということをアピールするためには、幅広い知識を身に付けて、それを形にする教養を身に付けなければいけないという自己意識を強めていきます。でも高等教育を受ける学生そのものが肥大化していく中で、何を讀んでいいかわからない、どうやって生きていけばいいかわからないという話になります。このような状況下で、教養のマニュアル化というような状況にまで進んでいく事態となります。ただし、教養のマニュアル化が進む一方で、教養を深く身に着け人格を陶冶することこそが自己の高い学歴を有する自己の責任で

あるという意識をもち、かつ、それをしっかり真摯に受け止めた人物の代表として、香川県では大平正芳という人物がいる、なんていうことをご説明することができるかと思います。ここで本来は、先に述べた教養のマニュアル化を進めた人物として、教養叢書の生みの親である、河合栄治郎という人の話をしようと思ったのですが、時間がありません。只今お見せしているスライドに、教養叢書をつくった東大の先生である河合栄治郎の写真と、教養叢書の表紙、そして一番右は、政治家になったあとの大平正芳が本を読んでいる写真があったので、載せてみました。

大変長くなりましたし、決められた時間をオーバーしましたけれども、一応簡単にまとめたことを申し上げようと思います。当たり前の価値観や制度、その来歴と人々の構図と反発を振り返れば、近世から近代へ移り行く中で、西欧由来の近代的な価値観を獲得した若者が、実践、例えば自由民権運動へと踏み出す者も多く現れたんですけれども、統治者たちによって挫折を強いられます。その後、近代的な統治者になるためには教育システムで学ぶことを所与の前提とする価値観が成立した社会の下、若者たちの一部は、進んで高等教育を学び、統治側の一員となることを目指していきました。そして彼らは単なる受験エリートではないことの証明として、教養を積極的に摂取するんですけれども、社会変革をも視野に入れた西欧文献の摂取は、統治者側から弾圧を受けることとなります。これは当時の若者たちにとって、ある種の挫折と言ってもいいでしょう。

そして弾圧後の社会で、教養は一部アクセサリー化へと堕してしまいう側面も有してしまっていますが、それをしっかりと真摯に受け止めた人物たちもまた、高等教育を学ぶ中で一定数誕生します。彼らの中から、学生時代に摂取した教養で得られた知見、つまり、社会のリーダーとして、西欧由来の近代普遍的な価値観の浸透と実践に、生涯をかけて取り組む者も現れてきます。非常に知識人的な企業家、政治家の一部に、そういった彼らの真摯な生きる姿を見ることもできるんじゃないかと思います。

大変申し訳ございません、長々としたお話でしたが、以上で終わります。ありがとうございました。

### 報告3. 中国知識人の近代

張 曉紅（香川大学経済学部）

ご紹介いただきました、張と申します。私も同じく香川大学経済学部から参りました。香川県での勤務をきっかけに四国に居住するようになってから2年目です。今、いろいろと観察・体験しながら、この島について楽しく勉強させていただいているところです。私は中国の出身で、近代東アジアの研究をしていることもあって、ありがたく今回のチャンスを頂きました。

さて、今日は「中国知識人の近代」の話をさせていただきます。今回のセミナーは、「知識人がどのような葛藤の中で西洋の学問に向き合っていたのか」がテーマです。私が、魯迅、嚴復、梁啓超の3人の中国知識人を取り上げて、彼らの作品や人生の軌跡を通して、①中国近代の代表的な知識人がどのような葛藤の中で西洋の学問に向き合っていたのか、②そもそも、中国はなぜ西洋の学問に向き合う必要があったのか、について話します。

古代文明の一つとされる「黄河文明」をもつ大国——中国は、長い歴史と重厚な文化の蓄積があり、思想的には、諸子百家による「百家争鳴」の思想・文化の大繁栄の時代もありました。また中国は「聖人」とも呼ばれるほど偉大な思想家である孔子が生まれ育ち、世界に大きな影響を及ぼした儒学を生み出した国でもありました。儒学の教えが盛んだった中国は西洋の学問を、そもそも学ぶ必要はあるのでしょうか？